「丸池復活プランづくりワークショップ」支援の実際

Actual Situation of Supporting Activity to the Workshop of Maruike's Renaissance Plan

伊藤千恵子* 須藤 哲*
CHieko ITO Satoru SUTO

はじめに

新川丸池公園は、三鷹市の東南部に位置する面積約2.1haの都市公園である。勝淵神社を取り囲むように梅林や畑、雑木林や原っぱ公園、ここは、都市の中に残された数少ない自然が感じられる地域である。かつて、仙川の水源であった丸池は、その後周囲の都市化が進み、湧水も少なくなり、池の水は汚れ、仙川の河床が掘り下げられ、埋め立てたのは1969年であった。その後、そこで遊び育った人達から丸池復活を期待する熱い思いが寄せられ、*1「コミュニティカルテ」を基に市民がつくった**2「まちづくりプラン」に丸池復活が提案され、その後三鷹市が策定した「緑と水の回遊ルート整備計画」(1994年)に盛り込まれた。

1997年、「丸池復活プランづくり」は地域の皆さんによって構成された「丸池復活プランづくり運営委員会」(井上利明委員長)を中心にワークショップ形式で行われた。完成した「丸池復活プラン」は1997年11月ワークショップ参加者の皆さんから三鷹市長に提言され、翌1998年に一期工事区域を対象とした「丸池実施設計ワークショップ」が行われた。三鷹市は、提言されたプランを基に実施設計を行い、1999年9月工事着工、2000年3月末に完成する予定である。地域の皆さんから寄せられた「丸池復活」に対する熱い思いは10年余りを経て実現するのは目前だ。

「丸池復活プランづくりワークショップ」の支援組織の主体である(財)三鷹市まちづくり公社の立場から熱意あふれる地域のみなさんによるワークショップの裏側の紹介を行うと共に、支援組織の一員として活動した設計者の立場から支援体制や進行のあり方などについて整理を行う。

■「財団法人三鷹市まちづくり公社」の立場から

(財)三鷹市まちづくり公社は、「市民が主体的に行うまちづくりを支援する」目的で、1994年4月1日に発足し、財団法人として東京都から認可を受けたのは1996年4月1日、三鷹市が100%出捐する団体である。

1. 丸池復活プランづくりワークショップへの助走

ワークショップを開催する半年前(1996年8月頃)から①丸池復活プランづくりワークショップの趣旨、②丸池復活に注目してもらうため、秋にイベントを開催すること、③イベント実行委員会を丸池復活プランづくり運営委員会の母体にすることなどについて新川中原住区内の町会長・自治会長・青少年対策地区委員長等の自宅を戸別訪問し説明を行った。この戸別訪問によって、ワークショップのスタートにあたって一定の理解を得ることが出来たと考えられるし、その後の会議の進行をスムーズなものにした。

そして、地域の皆さんに丸池復活を知らせるために、実行委員会が、「第1回丸池わくわくまつり」を開催したのは1996年10月26日であった。丸池わくわくまつりの準備は、実行委員が子供班・総務班・歴史班・記録班・模擬店班・餅つき班等に分かれ、仕事を終えてから夜の打ち合わせ会に参加し、まつりのアイデアを出し合い、意見を調整しながら進められた。すでに協働作業や合意形成の始まりであった。

初めてのまつりには、子供から大人まで1000人以上が集まって、盛大に開催された。このまつりで「丸池復活」は地域の皆さんに広く認知された。その後、実行委員会が母体となって、井上利明委員長と大木正雄相談役を中心に「丸池復活プランづくり運営委員会」が組織され、いよいよ、ワークショップが始まったのは1997年2月のことだった。既に、ワークショップの準備を初めてから6ヶ月を経過していた。以来、まつりは年々盛大になり、1999年開催の第4回では、2000人を超える参加者を迎えた。

2. ワークショップの支援組織

○丸池復活プランづくり運営委員会＝ワークショップの運営(進め方の確認・参加者の受付・写真撮影・ビデオ撮影・ニュース編集等)

○(株)生態計画研究所 小河原孝生氏＝アドバイザー(生物・植物を始め、生態系全般)

*財団法人三鷹市まちづくり公社 **株式会社戸田芳樹風景計画

○(有)大久手計画工房 伊藤雅春氏＝企画・運営（ファシリテーター・プログラム作成・ワークショップの記録・ニュースの編集等）

○(株)戸田芳樹風景計画＝立体模型の作成・丸池整備工事実施設計

○三鷹市都市整備部緑と公園課＝市の立場で参加

○(財)三鷹市まちづくり公社＝ワークショップ全体のコーディネート

3. 丸池復活プランづくりワークショップ 三つのねらい

三鷹市まちづくり公社は、丸池復活プランづくりワークショップのコーディネートを行うにあたり、三つのねらいを持っていた。

(1) すばらしいプランをつくること

この地域の生態系に考慮したすばらしいプランを作ること。そのため小河原孝生氏にアドバイザーとして参加していただき、ワークショップの中でミニ講座を開き、池と生物・植物との関係など生態系の知識を参加者が学ぶ機会を持てるように進めた。参加者が色画用紙等を使って手作りのした6つの立体模型をひとつにまとめ、この地域の生態系に配慮し、参加者の希望を取り入れたプランを作っていたのは、(株)戸田芳樹風景計画のスタッフの皆さんである。

(2) ワークショップに参加した人々が新たなコミュニティをつくること

ワークショップは、毎回ティータイムを設け、お茶とお菓子を用意した。お菓子を食べながら、参加者同士が顔見知りになり、おしゃべりがはずみ、情報を共有したり、楽しい雰囲気づくりに配慮し、新しいコミュニティができるように努めた。また、ひとつの課題に対し十分な意見交換ができるように、プログラムの進行にはゆとりを持たせた。

(3) ワークショップに参加した人々が自治を担う市民になること

このワークショップの経験を通して参加者の皆さんが「自分たちのまちは自分たちでつくる」と、市民が主体的にまちづくりを実践するようになったら、どんなにすばしいかと夢を見ながら、ワークショップのコーディネートを行ってきた。地域の皆さんを中心に、運営委員会を組織

していただき、ワークショップの運営に主体的にかかわっていただいた。運営委員会の皆さんには、会場の設営、参加者の受付、資料配布、参加者の誘導、茶菓の用意、写真・ビデオ撮影、広報誌「丸池よみがえる」の編集・発行を初め、ワークショップを盛り上げ、丸池復活が地域に認知されるよう様々な工夫も行っていただいた。

そして、まちづくり公社の重要な役割は、このワークショップが楽しくスムーズに運営され、地域の皆さんに親しまれ、大切にされる公園プランができあがり、新しいコミュニティが作られ、完成したプランがこの地域の皆さんに広く認知されることだと認識していた。

完成したプランが、「特定の人々によって作ったもの」と思われるようであっては失敗に終わってしまう。そのためには、①公園隣接住民の参加を得ること、②多くの方に参加していただくように、毎回電話による参加の呼びかけを行ったこと、③毎回のワークショップの内容をニュースにして約2000部を地域に配布し、参加しなかった方にも情報の提供をしてきた。運営委員会の皆さんの呼びかけもあって、参加者は、延べ1000人以上となった。

4. 前提条件の提示

ワークショップをスムーズに進めるために、目的や計画づくりを進める上で次の前提条件を共有した。

- ①相互の役割分担の明確化
- ②三鷹市が整備工事を必ず実施する予定であること
- ③全体のスケジュールの確認
- ④道路を含めた周辺整備計画の内容
- ⑤プランづくりに反映できること、できないこと

5. 情報の公開と共有

ワークショップで参加者・専門家・行政が共通の土俵に立つためには、情報の共有が必要であり、情報公開は徹底して行わなければならない。①プランづくりの対象面積、②土地の所有形態、③丸池の里の全体構想、④地質等を始め新たに発生した情報も、タイムリーに提供し共有した。

丸池復活プランづくりワークショップは、運営委員会の主体的な運営、伊藤雅春氏によるすばらしい進行、いつも

○市長への提言

○第一回丸池わくわくまつり

○ワークショップの風景

適切なアドバイスをくださる小河原孝生氏、環境に配慮した設計者の戸田芳樹風景計画、行政職員のスタッフにより進められた。ワークショップの準備段階では、伊藤雅春氏との納得いくまでの激しい議論は時に深夜にも及ぶこともあった。毎回、会議の事前打ち合わせに、井上利明委員長のご自宅まで伺ってご相談させていただいた。1年間に約30回の運営委員会を開催したので、事前打ち合わせも同じ回数になる。そして、各ワークショップ開催前に、運営委員会会議を開き、プログラムの説明と質疑、役割分担の確認を行った。会議では、全員の合意を得ながら、プログラムの変更も行った。こうして細部に渡る打ち合わせが行われワークショップは開催された。

■ 設計者の立場から

市長への提言前後、「丸池復活プランづくり」が全国紙ばかりか数多くの地方紙でも取り上げられ、紙面をにぎわせたことは記憶に新しい。各紙とも、表現の差はあるものの、ワークショップが地域住民の代表者によって運営されていることと、参加者の意見が色濃く反映された計画であることが中心の記事となっていた。これは、参加型の場づくりを越えた「市民主体のまちづくりが」注目されたことに他ならない。

ワークショップ形式による参加型の場づくりの成功の鍵は、第一に参加者の意識の高さに左右される。丸池復活プランづくりでは、丸池の復活が市民の強い希望であり、公園づくりへの合意がすでにあったこと、ワークショップの運営を地域住民の代表者が主体となって行ったこと、さらに、この井上委員長を中心とした運営委員会の下地となる地域のコミュニティがある程度成熟していたことが大きな要因となった。そして、市民主体のプランづくりを支援する体制と手法の充実が第二の鍵となり、㈱三鷹市まちづくり公社を中心とした支援組織がこれに当たった。

ここでは、まちづくり公社とともにワークショップの支援スタッフの一員として参加した設計者の立場から、他地区にも応用可能な骨格的要素となる事業の目標設定、支援組織の構成と役割分担のあり方、参加型の場づくりの今後の展望などについて整理を行う。

1. 事業の目標設定

これまでのワークショップ形式による参加型の場づくりでは、ものづくりを主題とし、ワークショップ自体が目的となった展開となり、その手法に重きを置きがちになっているケースが見受けられた。この結果、参加型の場づくりが着地の見えないものとなりがちで、一過性のイベントのようなものとして受け取られ、定着した手法になり得ないのが現状のように思われる。

「丸池復活プランづくり」ではワークショップは選択肢

の一つであり、この形式を選択する際の前提となった目標設定があった。「ワークショップの三つのねらい」については前文で紹介したとおりであるが、地域住民主体の風景作りを念頭に、参加者が生活の場の一部として将来的にも関わりを持ち続けられる下地づくりを目的とした目標設定であった。ワークショップ形式の採用だけでなく、支援組織のメンバー構成やワークショップの進行など全てがこの目標に基づいて設定されている。そして、この目標がワークショップ進行のプログラム立案や、各回のワークショップの振り返りなどの細部にわたる道しるべとなっていた。

参加型の場づくりの支援組織立ち上げと運営に当たっては、これらを念頭に置いた各地区個別の事情を反映した目標設定を行うことが重要なポイントとなる。

2. 支援組織の役割分担

ワークショップの支援組織の構成は先に示したとおり、公社とワークショップのプログラム立案や進行役であるファシリテーターの他に、専門家を加えた体制であること、そして各々の役割分担が明確であったことが大きな特色となっている。これは、ワークショップのねらいのひとつである[すばらしいプランをつくること]を念頭に置いた体制であった。(1) ファシリテーターと専門家

ファシリテーターは、ワークショップの進行役として不可欠な存在であり、個人の意見を交えることなく参加者の意見をまとめ上げることが求められる。また、公園づくりやまちづくりでは、計画・設計などの専門的な知識をもった技術者の意見が必要とされる場面が多く発生する。一方ファシリテーターは、日常業務において計画・設計に携わっている場合も多く、時として二つの役割を兼務する場合がある。ここで注意が必要なことは、二つの役割を兼務した場合、中立的な立場でありながら個人の意見を述べなければならない局面があり、結果、参加者の混乱をまねき、円滑な進行に支障をきたすおそれがあることである。参加者のワークショップに対する経験や知識の度合いにもよるが、基本的にはファシリテーターと専門家は役割分担を明確にすることが望ましい。

(2) 必要に応じた専門家の参加

ワークショップへの専門家の参加は参加者の専門知識の共有化を促進し、知識の差による意見の偏りを是正すると共に、公平な判断を導き出すことが可能となる。そして、専門家に参加を要請する場合は、設計者だけでなく、必要に応じてワークショップのテーマに合致した分野の専門家に要請することが望ましい。「丸池復活プランづくり」はかつての丸池復活が主題となっている。そして、人々が望む丸池は、地域で育った大人達が子供の頃に見た、いきもののすむ水辺であった。ワークショップの支援組織立ち上げの際にはこの主題を受け、いきものやその生息環境に関

する専門知識をもった生態プランナーに参加が要請された。

そして、専門家はその知識の伝達だけではなく、支援組織の一員としてワークショップの主題や目標をよく理解したうえで、適切でわかりやすい説明や、参加者の興味を引き出す学習の場の提供を心掛けることが求められる。

(3) 横断的な行政の支援

2ヶ年を通じ、公園の実施設計と工事の事業主体である三鷹市緑と公園課が、全てのワークショップに参加した。そして、対象地の概要、土地の所有、事業スケジュールや進捗など、ワークショップの進行とあわせた、行政側からの詳細な情報提供を行った。隣接道路の扱いについても関係部署が出席して、ワークショップに反映できることとできないことの確認と伝達を行った。このように、関係各署の横断的な支援が不可欠であることはいうまでもない。

3. ワークショップの進行

参加者が気軽に、そして継続的にワークショップに参加するためには、毎回の進行を決定するプログラムやツールの充実はもとより、これらを設定するに当たっての、事前の準備と参加を促す広報活動が重要となる。

(1) 事前の準備

ワークショップでは、毎回おおむね次の流れで準備と綿密な打ち合わせが行われた。①公社とファシリテータによる大枠のプログラム立案。②専門家を交えた具体的なメニュー設定とツールの準備。③運営委員会と合同のシュミレーションとプログラム修正。④本番ワークショップ。⑤運営委員会と支援組織によるワークショップの振り返り。

このような何段階かの工程に参加者の代表が参加し意見を述べることによって、相互の意志の疎通が高まり、内容の濃いワークショップ進行が可能となった。

(2) 広報活動

より多くの人たちの参加を促し、内容を認知してもらうために、ワークショップ開催に先駆けて公社が発行した「ワークショップのお知らせ」と、ワークショップ後に発行した「ワークショップニュース」が地域に配布された。また、運営委員会が主体となって編集・発行した情報誌「丸池よみがえる」が同時に配布されたことは、市民の視点で報告される内容が読者に直接伝わり、大きな役割を担っていた。

4. 参加型の場づくりの展望

参加型の場づくりの着地点は、ワークショップの円満な終焉でも、工事の完成でもない。参加型の場づくりを通じた参加者同士のコミュニティの醸成や、行政と市民の相互理解がいかに図れたかはもとより、完成した場を通じてこの関係を継続しつつ、市民がその場にどう関わり続けるかが重要なポイントとなろう。新川丸池公園の事業では、2

年に渡るワークショップを経て、今後も何らかの形で公園との関わりを持ち続けたいとの声が大きくなっていると聞いた。参加型の場づくりの先に見える「市民主体のまちづくり」の芽生えに期待して、活動の今後を見守りたい。

■ おわりに

ここに感激して伝えたいことがある。それは丸池公園に隣接する「杏林大学看護婦寮跡地ワークショップ」が丸池復活プランづくり運営委員会のコーディネートで、今年1月15日から始まったことである。市民が主体的にワークショップの進め方を考え、プログラムをつくり、進行も行っている。プロのファシリテーターもアドバイザーもなく、地域の皆さんの知恵と協力により、ワークショップが始まった。第1回のワークショップでは、「落ち葉・枝打ち・堆肥から炭焼へ」と、『リサイクル型公園』にしたいという声が出たとのこと。今後のワークショップの行方が楽しみである。「行政にお願いするばかりではなく、自分達でできることは、自分達でやろう」との発意の表れを感じる。丸池復活を目前にし、この地域で『市民主体のまちづくりの胎動』を感じ、痛く感動している。

最後に、丸池復活プランづくり運営委員会の皆さんに心から、エールを送りたい。

○工事中には参加者で水草の植え付けが行われた。

※1 「コミュニティカルテ」(昭和55年～平成元年)

三鷹市内7つのコミュニティ住区単位に市民が地域診断をし、まちづくりに対する要望をまとめたもの

※2 「まちづくりプラン」(平成元年)

コミュニティカルテを基に、1991年(平成3年以降)の三鷹市の基本構想、基本計画に反映させる目的で、まちの整備イメージを市民がまとめたもの

参考文献

- 1) 「丸池復活プランづくりワークショップの記録」：丸池復活プランづくり委員会・財団法人三鷹市まちづくり公社(平成9年11月発行・平成11年4月改訂)
- 2) 「市民参加による生物多様性回復手法の開発に関する調査業務報告書」：建設省土木研究所緑化生態研究室・(社)日本環境教育フォーラム(平成11年3月)